

オーストラリアにおけるコミュニティ音楽療法の実践と理論

名郷 泉 (Musical Between – Inclusive Music Centre ディレクター)

筆者がオーストラリアにおいて実践してきたコミュニティ音楽療法の歩みとその理論的背景の移り変わりを検証したい。まず筆者がコミュニティ音楽療法に目を向けることになったきっかけは、2011年の東日本大震災後にシドニーで有志が集まって開催したチャリティーコンサートにおいてである。障害の有無、国籍や人種の違い、年齢も様々な演奏者や観客皆が一体になるようなこのコンサートでの経験から、コミュニティ音楽療法をまず理論からではなく体験を通してそのパワーと効果に目が開かれた。それ以降、筆者が運営する **Musical Between** では個人やグループの音楽療法に加え、様々なコミュニティ音楽療法やコミュニティ活動の試みがなされてきた。そしてその時々局面から理論背景も推移してきたが、一貫して軸となっている理論は、フローセオリー（ポジティブ心理学）や社会心理学が提唱する、「人間は差異的自己（他者とは異なる独自性のある自己）と統合的自己（他者と共通性や属性をもつ自己）の双方を満たして初めて自己充足感を得る」という全人間的視点からの考え方である（Csikszentmihalyi, 1990）。後者の「統合的自己」を満たす為には社会との関わりは必要不可欠である。Alvin は、音楽療法は対象者の内的な世界と外的な世界を結ぶ架け橋の役目を担うことのできる可能性があるとして述べている（Vaillancourt, 2009）。そして生態学的音楽療法の見地からは、個人と社会の相互関係を鑑み、社会に働きかけていくことも音楽療法の重要な役割となりうる。音楽療法によって変化の対象となりうるのは音楽療法クライアントだけに限らず、音楽療法士も含め、クライアントを取り巻く社会そのものでもあるからである（Bruscia, 1998）。またオーストラリアは多民族国家であることから、Stige (2002) の提唱する文化中心音楽療法における、文化は自己と社会を形成する基盤であり、音楽療法の中でそれぞれの文化への理解と尊敬を育むことが重要であるという考え方は、筆者の取り組むコミュニティ音楽療法の活動の大きな着眼点の一つでもある。

このように、**Musical Between** では、音楽療法を障害のある個人やグループだけに限定せず、広く一般の人達との関わりの中で双方が共に歩むような経験を積むことが、個人にとっても社会にとっても重要ではないかと考える。本講習会では筆者のコミュニティ音楽療法の取り組みと理論的背景を合わせて紹介しながら考察を深めたい。

参考文献

- BRUSCIA, K. E. 1998. *Defining Music Therapy: Second Edition*, NH, Barcelona Publishers.
- CSIKSZENTMIHALYI, M. 1990. *flow: The Psychology of Optimal Experience*, NY, Harper Perennial.
- STIGE, B. 2002. *Culture-centred music therapy*, Gilsum, NH, Barcelona Publishers.
- VAILLANCOURT, G. 2009. *Mentoring Apprentice Music Therapists for Peace and Social Justice through Community Music Therapy: An Arts-Based Study*.

■プロフィール

桐朋学園大学音楽療法コース修了。日本にて精神科、障害者、及び高齢者領域で実践の後オーストラリアへ渡り、シドニー工科大学音楽療法準修士課程、西シドニー大学創造的音楽療法修士課程、同大学 Graduate Certificate in Research Study を修了。オーストラリア音楽療法協会認定音楽療法士。養護学校、障害者福祉センター、ノードフ・ロビンズ音楽療法センター等に勤務。現在はシドニーにて、**Musical Between – Inclusive Music Centre** を主催し、音楽療法、芸術療法、また障害の有無に関わらず共に楽しめるコミュニティプログラムやコンサートなど、地域に根ざした活動を展開している。